県立広島大学人間文化学部紀要　2,　119-129（2007）

『ユリシーズ』と反ユダヤ主義
― 何故ブルームはユダヤ人なのか？

高　橋　　渡

序

『ユリシーズ』の主人公レオポルド・ブルーム（Leopold Bloom）は、1866年、アイルランドに移住したハンガリー系ユダヤ人ルドルフ（ヴィラグ）・ブルーム（Rudolph Bloom）とEllen（旧姓Higgins）との間に生まれる。ブルームに関して言えば、母親はユダヤ人ではなく、また割礼も受けていない。宗教的には、父親がブルームの生まれる前にプロテスタントに改宗しており、ブルーム自身はモリー（Molly）と結婚する際にカトリックに改宗している。このような点を考慮すると、ブルームは正確な意味ではユダヤ人とは言い難いのかも知れない。しかし、彼はユダヤ人の血を引いており、ダブリンではユダヤ人として迫害も受けている。その意味では、ブルームは間違いなくユダヤ人である。

一方、モリーは1870年、英国領ジブラルタルで生まれる。父親はアイルランド人で、当時英国海軍士官としてジブラルタル要塞に勤務していたブライアン・トウィーディー（Brian Cooper Tweedy）、母親はルニータ・ラレード（Lunita Laredo）である。母ルニータはその名前、また、モリーが「母の血を引いてユダヤ女みたいな顔をしているから」（"on account of my being jewess looking after my mother" [18:1184-5]）[1] と述べていることからも分かるようにスペイン系ユダヤ人であったようだ。ジブラルタルはスペインのユダヤ人追放を受けて移住したユダヤ系の住民が非常に多かったことを考えてみても（現在もジブラルタルの住民の60%以上をユダヤ系住民が占める）、母親がユダヤ系であったことはまず間違いないだろう。モリーの母親はモリーが幼い頃に死ぬか家を出るかしたようで、正式に結婚していたかどうかも不明だ。彼女は少女時代をジブラルタルで育つが、16歳の時に父親に伴ってダブリンに移り住み、1888年にブルームと結婚する。

『ユリシーズ』には一貫してダブリンが描かれるが、何故、主人公のブルームと、この作品の主要な登場人物の一人である妻モリーが、アイルランド人ではなく、当時「外国人」と見なされていたユダヤ人に設定されているのであろうか？　本論の趣旨は、とりわけ主人公のレオポルド・ブルームが何故ユダヤ人に設定されているのか、そしてそれは『ユリシーズ』という作品全体の中でどのような意味を持つのかを検証することにある。

1　20世紀初頭のアイルランドにおける反ユダヤ主義

19世紀末まで、アイルランドに住むユダヤ人の数は決して多くはなかった。しかし、1890年代に入るとその数は急速に増える。下の表は国勢調査によるユダヤ人人口の推移を示したものだ。[2]

年	1861	1871	1881	1891	1901	1911
人口	341	230	394	1,506	3,006	3,805

この統計を見ると、80年代から90年代にかけて急激にユダヤ人の人口が増加していることが分かる。

その原因は1881年にロシアで起こった、所謂“Russian pogroms”（「ユダヤ人虐殺」）にある。

1881年、帝政ロシアにおいてアレクサンドル2世が革命分子によって暗殺される。反ユダヤ主義の新聞がそれをユダヤ人の仕業だと報じ、反ユダヤ主義を煽ったため、各地でユダヤ人に対する暴動が起こる。それは広く南ロシアからポーランドにまで及んだ。1882年にはアレクサンドル3世によって、所謂五月法（“May Laws”）[3] が制定され、多くのユダヤ人が長年住んだ居住地から追われ迫害を受けた。その結果、約200万人のユダヤ人がロシアから米国を中心に、パレスチナ、カナダ、南アフリカ、英国などに移住した。英国には、1881年から1906年の間に約15万人のロシア・東欧のユダヤ人が移住し、その余波はアイルランドにも及んだ。[4]

ユダヤ人人口の増加に伴い、アイルランドでも反ユダヤ主義の動きが高まりを見せる。それを象徴する事件が1904年リメリックで起こる。所謂、“The Limerick pogrom”[5] である。当時、リメリックに“Arch-confraternity of the Holy Family”というカトリックの保守的な教団があった。それは1868年にレデンプトール会（“Congregation of the Most Holy Redeemer”）[6] の修道士によって設立され、1904年当時この教団には約6000人のメンバーがいた。1902年にジョン・クレイ神父（Fr John Creagh）が弱冠32歳でその指導者となるが、彼はユダヤ人商人に対するカトリックの商人の不満に応え、ユダヤ人商人を弾劾する扇動的な演説を行い、反ユダヤ主義を煽る。次に挙げるのは彼の演説の一部である。

> Twenty years ago and less Jews were known only by name and evil repute in Limerick. They were sucking the blood of other nations, but those nations rose up and turned them out and they came to our land to fasten themselves on us like leeches, and to draw our blood when they had been forced away from other countries. They have, indeed, fasten themselves upon us, and now the question is whether or not we will allow them to fasten themselves still more upon us, until we and our children are the helpless victims of their rapacity.[7]

やがてこの反ユダヤ主義の動きは、ユダヤ商人に対するボイコット運動へと展開して行く。

それに対し、ユダヤ人を擁護しボイコットを阻止しようとする動きもあった。リメリックに住むユダヤ教のラビ、レビン師（Elias Bere Levin）は、マイケル・ダヴィット（Michael Davitt）[8] に、ユダヤ人に対する暴動とボイコットを阻止するため協力して欲しいと要請する手紙を送り、ダヴィットはそれに応え1904年1月16日付の*Freeman's Journal* 誌上に、ユダヤ人に対する迫害を行わないよう呼びかける記事を投稿する。また、警察も反ユダヤ主義の動きに対して警戒を強め、ユダヤ人の店が集まる地域を警備するため警官を配備するなどの対策を講じた。しかし、そのような動きがあったにもかかわらず、クレイ神父に対する支持は広がり、反ユダヤ主義の流れを阻止することは出来ない。ついに1904年、ボイコットが始まり、ユダヤ人商人は店を閉めたり、夜間の外出を控えたりしなければならない状況に陥った。

リメリックでのこの事件はダブリンでも盛んに報道され人々の関心を集めるが、とりわけ商人や労働者階級の間で反ユダヤ主義的感情が広まってゆく。

2　『ユリシーズ』と反ユダヤ主義

1904年のリメリックでのボイコット事件は、この年の6月16日の一日を描いた『ユリシーズ』にも影を落としている。直接的な言及としては、第18挿話（‘Penelope’）でモリーが次のように述べてい

る箇所を挙げることが出来る。

> he was going about with some of them *Sinner Fein* lately or whatever they call themselves talking his usual trash and nonsense he says that little man he showed me without the neck is very intelligent the coming man *Griffiths* is he well he doesnt look it thats all I can say still it must have been him he knew there was a *boycott* … [18:383-7]（イタリクスは筆者）

ここに出てくる“boycott”は明らかにリメリックでのボイコット事件を指している。そして“Griffiths”とあるのは、アーサー・グリフィス（Arthur Griffith）のことである。彼は1899年から1906年まで*United Irishman* 誌の編集長をつとめた民族主義者で、“Sinn Fein”を結成し、1922年には「アイルランド自由国」（Irish Free State）の初代大統領になった。ここでグリフィスの名前が出てくるのは決して偶然とは思えない。グリフィスはバック・マリガン（Buck Mulligan）のモデルとなったオリバー・セント・ジョン・ゴガティ（Oliver St John Gogarty）の友人でありジョイスとも面識があった。彼は徹底した反ユダヤ主義者で、例えば1893年９月23日付の*United Irishman* 誌上で、“I have in former years often declared that the Three Evil Influences of the century were the Pirate, the Freemason and the Jew.”[9] と述べている。ジョイスがこの事実を意識した上で、ユダヤ人問題に絡めて彼の名前に言及していることは間違いない。ここでモリーは“Sinn Fein”を誤って、“Sinner Fein”と言っている。もちろん彼女は“Sinn Fein”のこともグリフィスのこともよく知っている訳ではなく、これは単なる間違いに過ぎないと考えるべきだろう。しかし、夫のブルームがユダヤ人であり、フリーメイソンと目されていることを考えれば、彼女にとってはシン・フェインもグリフィスも“Sinner”に他ならない。この言い間違いは民族主義者の他民族迫害に対する強烈な皮肉になっているのである。

ジョイスは、1902年12月にダブリンを去りパリに行くが、翌年、母危篤の電報を受け取り帰国する。ジョイスがパリに滞在していた時期、フランスではドレフュス事件を機に反ユダヤ主義が高まっていた。この事件がジョイスに影響を与えたことはまず間違いない。リチャード・エルマンは次のように述べている。

> But he must have been affected also by the Dreyfus uproar in Paris, which continued from 1892 to 1906; it had reached one of its crises in September 1902, just before Joyce's arrival in Paris, when Anatole France, a writer he respected, delivered his eloquent oration at the funeral of Zola, whose *J'accuse* was still stirring up Europe. A connection between the Jew and his artist-defender may have been fixed in Joyce's mind by the connection between Zola, France, and Dreyfus. When he returned to Dublin in 1903, he was in time for one of the rare manifestations of anti-Semitism in Ireland, a boycott of Jewish merchants in Limerick that was accompanied by some violence.[10]

『ユリシーズ』で、ドレフュス事件を強硬な反ユダヤ主義の新聞*La Libre Parole* 誌で扇情的に扱い、反ユダヤ主義を煽ったジャーナリスト、ドゥリュモン（Edouar Adolphe Drumont）の名前が２度（3:231,493）言及されていることもこの事実を裏付ける。

ドレフュス事件といい、リメリックのボイコット事件といい、この時期ジョイスの周辺にはユダヤ人を巡る問題が渦巻いており、ジョイスがこの問題に関心を持ち、丁度この時期を時代背景とする

『ユリシーズ』で取り上げるのにはある種の必然性があったと言ってもいいだろう。

『ユリシーズ』には反ユダヤ主義の言説が繰り返し登場する。まず、バック・マリガンのオックスフォード時代の友人で、アイルランドの民話を研究するためにマーテロタワーに滞在している英国人ヘインズ（Haines）は、ユダヤ人について次のように述べている。

> — Of course I'm a Britisher, Haines's voice said, and I feel as one. I don't want to see my country fall into the hands of German jews either. That's our national problem, I'm afraid, just now. [1:666-8]

ヘインズがこう述べる背景には、上述したように、この時期英国ではユダヤ人人口が急増し、反ユダヤ主義の風潮が高まっていたという事実がある。

次に、スティーブン・デダラス（Stephen Dedalus）が臨時教師を勤めるプロテスタント系の学校の校長で、北アイルラド出身のアングロ・アイリシュであるディージー校長（Mr Deasy）は、反ユダヤ主義的な言葉を繰り返し述べる。

> — Mark my words, Mr Dedalus, he said. England is in the hands of the jews. In all the highest places: her finance, her press. And they are the signs of a nation's decay. Wherever they gather they eat up the nation's vital strength. I have seen it coming these years. As sure as we are standing here the jew merchants are already at their work of destruction. Old England is dying. [2:346-351]

それに対してスティーブンは、"A merchant, Stephen said, is one who buys cheap and sells dear, jew or gentile, is he not?" [2：359-60] と反論するが、ディージー校長は更に、

> — They sinned against the light, Mr Deasy said gravely. And you can see the darkness in their eyes. And that is why they are wanderers on the earth to this day. [2：261-3]

と続ける。

この日はスティーブンの給料日で、ディージー校長はスティーブンに給料を払った後、お金の扱いについてスティーブンに説教し、"You don't know yet what money is. Money is power. … But what does Shakespeare say? Put but money in thy purse." [1:236-9] とシェイクスピアを引用する。もちろんこれはイアーゴーの台詞であり、シェイクスピア自身の考え方ではない。その会話の最中にスティーブンは頭の中で、ディージー校長に対し皮肉を込めて、"Good man. Good man." [2:252] (*Merchant of Venice*: 1:3,12; "Antonio is a good man.") と、『ベニスの商人』を引用する。(バッサーニオがシャイロックから金を借りる場面。アントーニオが保証人となる。) ここでは『ベニスの商人』を引用することによって、ディージー校長のユダヤ人に抱くステレオタイプ的なイメージが暗に皮肉られている。

さらにこの挿話の最後の場面で、ディージー校長は帰ろうとするスティーブンを追いかけて、次のような冗談を言う。

> — I just wanted to say, he said. Ireland, they say, has the honour of being the only country

which never persecuted the jews. Do you know that? No. And do you know why?
He frowned sternly on the bright air.
— Why, sir? Stephen asked, beginning to smile.
— Because she never let them in, Mr Deasy said solemnly. [2：437-442]

この挿話「ネストール」（'Nestor'）は、『オデュッセイア』との対応では、テレマコスが父の行方を探るため、賢者とされていたネストールのもとを尋ねる場面に相当するが、ネストールにあたるディージー校長はしばしば誤った歴史認識を示し、皮肉の対象となる。この場面でもディージー校長は歴史認識を誤っており、そのこと自体を含め、彼の反ユダヤ主義が痛烈に皮肉られている。

場面は変わり、第12挿話（'Cyclops'）では、民族主義者の「市民」（Citizen）たちがバーニー・キアナンのパブ（Barney Kiernan's）で酒を飲みながら話をしている。彼らはユダヤ人の悪口を言い、アイルランドに渡ってきたユダヤ人について、"Those are nice things, says the citizen, coming over here to Ireland filling the country with bugs." [12:1141-2] と、極めて排他的な態度を示す。このような排他的な考え方は、彼らの敵である筈の英国人ヘインズや、アングロ・アイリシュでありユニオニストのディージー校長の考え方と驚くほどよく似ている。

ブルームは「市民」をはじめとする民族主義者たちと民族と迫害の問題について議論をするはめになる。そこでブルームはまず次のように述べる。

— Persecution, says he, all the history of the world is full of it. Perpetuating national hatred among nations. [12：1417-8]

そして会話は次のように続く。

— But do you know what a nation means? says John Wyse.
— Yes, says Bloom.
— What is it? says John Wyse.
— A nation? says Bloom. A nation is the same people living in the same place.
— By God, then, says Ned, laughing, if that's so I'm a nation for I'm living in the same place for the past five years.
So of course everyone had the laugh at Bloom and says he, trying to muck out of it:
— Or also living in different places.
— That covers my case, says Joe.
— What is your nation if I may ask? says the citizen.
— Ireland, says Bloom. I was born here. Ireland. [12:1419-31]

そして、ブルームは、自分はまた「盗み取られ、強奪され、侮辱され、迫害されている民族にも属している。」（"I belong to a race too, says Bloom, that is hated and persecuted. Also now." [12:1467]）と述べ、更に次のような会話が続く。

— Are you talking about the new Jerusalem? says the citizen.
— I'm talking about injustice, says Bloom.

— Right, says John Wyse. Stand up to it then with force like men. [12.1473-5]

それに対しブルームは、

— But it's no use, says he. Force, hatred, history, all that. That's not life for men and women, insult and hatred. And everybody knows that it's the very opposite of that that is really life. [12.1481-83]

と述べ、その大切なものは「愛」("Love") だと言う。この生硬なブルームの平和主義をそのままジョイスの主張と取ることは出来ないにせよ、『ユリシーズ』の文脈全体の中で考えるとき、この部分は幾つかの重要な意味を持つように思われる。一つは、英国人であるヘインズが見せたユダヤ人という他民族を蔑視・迫害する偏狭な民族主義が、アイルランドの支配層であるユニオニストのアングロ・アイリッシュにも、そしてそれに対抗するアイルランドの民族主義の中でも反復されているという事実を暴露しているということだ。そのことはまた、英国の「力」による支配に対し「力」によって対抗しようとするアイルランドの民族主義が、皮肉にも、他民族に対する迫害、「力」による支配といった帝国主義的なシステムを反復しているという事実を暗示している。

デクラン・カイバード (Declan Kiberd) は1992年に刊行された『ユリシーズ』ペンギン版の序文で、ブルームはギリシャ叙事詩の「勇壮な」(heroic)「叙事詩のコード」を解体する役割を果たしていると述べているが、ブルームには確かにそのような役割を認めることができる。この『オデュッセイア』の反復である『ユリシーズ』において、ブルームはオデュッセウスの冒険を反復している訳であるが、オデュッセウスがギリシャの英雄であるのに対して、ブルームは、いわば、アンチ・ヒーローとして描かれている。例えば、ブルームは、ここでの迫害に対して「男らしく力で」対抗することはないし、また、ヘレネーの姦通がトロイ戦争を引き起こしたように、そしてオデュッセウスがペネロペイアの求婚者たちを殺害したように、妻のモリーと姦通を犯したボイラン (Boylan) に対し「力」で報復しようとはしない。少なくともここには、「力」による支配とそれに対する「力」による対抗、そしてさらにそれに対する「力」による抑圧、と言った、英国とアイルランドの間で展開されてきた血腥い歴史の反復、スティーブンの言う「悪夢」("a night mare") [11] としての歴史の反復を断ち切る可能性が示されている。

ブルームがユダヤ人に設定されている理由の一つは恐らくそこにある。つまり、英国の植民地支配によって迫害されているアイルランドの中で、さらに迫害を受ける者として、アイルランドの民族主義が、皮肉にも他民族に対する迫害や「力」による支配といった帝国主義的なシステムを反復しているという事実を暴露すること。そして、迫害を受けながらも、何とかかわし、決して「力」訴えることのない姿を通して、英国とアイルランドとの間に繰り返される血腥い歴史の反復を断ち切る可能性を示すことにあったのではないだろうか。

3　文化的混交としてのブルーム

先に引用した、ブルームの国民を同じ場所に住む人々だという定義は、偏狭な民族主義・国家主義に対する批判となっている。ブルームはユダヤ人であり、モリーもジブラルタルで生まれ、父親はアイルランド人だが、母親は恐らくユダヤ系スペイン人である。このような主要登場人物の設定自体が、アイルランドも実は複数の民族から成り立っているということを示し、当時アイルランドで高まって

いた排他的な国家主義・民族主義に対するアンチテーゼとなっているのである。

またブルームは、例えば、宗教的にはユダヤ教についての知識は持っているがユダヤ教徒ではない。また、モリーとの結婚の際にプロテスタントからカトリックに改宗しているが、カトリックの信仰も知識も殆ど持ち合わせていない。ブルームはユダヤ人であると同時に、アイルランドに生まれ育ったアイルランド人でもある。ブルームは、単一の民族には属さず、一つの信仰や信念に囚われることもない、いわば「文化的混交」として描かれている。当時のアイルランドの民族主義者たちは、ケルト文化・カトリシズム・アイルランド語こそ伝統的なアイルランド文化であると考え、それに囚われていた。ブルームは、いわば、そのような民族主義者たちの対極にあり、排他的で偏狭な民族主義に対する批判となっている。

第9挿話（'Scylla and Charybdis'）の図書館の場面で、スティーブンはシェイクスピア論を繰り広げる。そこでは、シェイクスピアの作品に描かれる人物は全てシェイクスピア自身を投影していると論じられ、シェイクスピアはシャイロックでもあると述べられている。

> — The sense of property, Stephen said. He drew Shylock out of his own long pocket. The son of a maltjobber and moneylender he was himself a cornjobber and moneylender, with ten tods of corn hoarded in the famine riots. [9:741-4]

シェイクスピアの作品には様々な国の様々な文化的要素が入り込み、彼自身そのような様々な要素を持った、"A myriadminded man" [9:768] だと言うのである。シェイクスピアはユダヤ人と重ね合わされ、それを通してブルームとも重ね合わされる。第15挿話（'Circe'）ではブルームの鏡に映る顔がシェイクスピアになっている場面があるが、それはブルームがシェイクスピアのごとく様々な文化的要素が混じり合った人物であることを暗示している。

この問題は『ユリシーズ』に見られるポストコローニアル的な文化観と深い関わりを持つ。『ユリシーズ』のテクストは様々な声からなり、それらを総合する声、つまり支配的なディスコースは存在しない。いわば、バフチン（Mikhail Bakhtin）の所謂ポリフォニックなテクストとなっている。このようなテクスト構造は、それ自体、アイルランドの歴史・文化といった『ユリシーズ』のテーマと深く関わっている。つまり、1904年当時のダブリンの現実をある意味でリアリスティックに描き出している『ユリシーズ』は、そこから聞こえる様々な「声」を通して、その現実が決して一つの「声」に還元されることのない複数的なものであることを示してくれるのである。当時のアイルランドの民族主義者、或いはアイルランド文芸復興運動を進めていた文学者、そして現在でも多くの人たちがアイルランドの歴史と現実を、アイルランド／英国、支配者／被支配者、カトリック／プロテスタント、アイルランド文化／英国文化、アイルランド語／英語、といった二項対立に基づいて見てきた。そしてそのような歴史観・世界観が、スティーブンが「悪夢」と呼んだ血腥い歴史の反復をもたらしてきた。文化的混交としてのブルームの人物設定は、アイルランドの民族も文化も決して単一なものではないということを暗示し、その二項対立を突き崩す役割の一端を担っている。

シェーマス・ディーン（Seamus Deane）は、彼が編纂した、*The Field Day Anthology of Irish Writing* のイントロダクションで、このアンソロジーには「キャノンを確立する意図は全くない」（"There is no attempt here to establish a canon."）と述べている[12)]。このアンソロジーは紀元550年から現代に至までの、アイルランド語、英語、ラテン語、ノルマン・フレンチなどで書かれた様々な分野の文献が含まれているが、彼がここで言わんとしているのは、アイルランド的なケルト文化の伝統、カトリックの伝統のみがアイルランド文化なのではなく、アイルランドの文化は様々な伝統から

成り立っているということである。ジョイスも確実に同様の認識をしていたのであり、彼がアイルランド文芸復興運動に与しなかったのは当然のことであった。ジョイスは、『ユリシーズ』において、アイルランドを単一民族・文化からなるものではなく、複数の民族・文化からなる混交的（ハイブリッド）なものだということを示すことによって、排他的な民族主義的ディスコースを否定するのである。ブルームの人物設定はこのジョイスの考え方を明確に反映している。

4 'Exile' としてのユダヤ人

『ユリシーズ』では "The Wandering Jews"（「彷徨えるユダヤ人」）という言葉が何度も登場する。この言葉は国を失ったユダヤ人に対してよく使われる表現であり、ユダヤ人が常に 'Exile' であったことを暗示する。ブルームの父親も、ハンガリーを後にしてダブリンに落ち着くまで、ウィーン、ブダペスト、ミラノ、ロンドンなどを転々とした「彷徨えるユダヤ人」であった。そして、ダブリンの街を彷徨するブルーム自身も、いわば、「彷徨えるユダヤ人」である。『ユリシーズ』にはもう一人街をさまよう主要登場人物がいる。ジョイスの分身スティーブン・デダラスである。スティーブンは先に引用したディージー校長との会話の途中で、パリで見た光景を思い出している。

> On the steps of the Paris stock exchange the goldskinned men quoting prices on their gemmed fingers. Gabble of geese. They swarmed loud, uncouth about the temple, their heads thickplotting under maladroit silk hats. Not theirs: these clothes, this speech, these gestures. Their full slow eyes belied the words, the gestures eager and unoffending, but knew the rancours massed about them and knew their zeal was vain. Vain patience to heap and hoard. Time surely would scatter all. A hoard heaped by the roadside: plundered and passing on. Their eyes knew their years of wandering and, patient, knew the dishonours of their flesh. [2.364-372]

ここでは、パリに住むユダヤ人たちが、アイルランドを出て異国の地に生活するスティーブン自身の姿と重ね合わされている。「服も言葉も身振りも」自分のものではなく借り物だというのは、スティーブンにも共通する。スティーブンの服はマリガンの借り物、言葉も、『若い芸術家の肖像』（*A Portrait of the Artist as a Young Man*）で英語は自分の言葉ではないと述べているように[13]、いわば、英国からの借り物である。また、このことはアイルランド人全体にも言えることなのかも知れない。ブルームが第12挿話の「市民」たちとのやりとりの中で述べた言葉のように、アイルランド人も英国人に「盗まれ、略奪され、迫害を受け」ており、英語はアイルランド人の言葉ではないのだから。ジョイス自身、若くしてアイルランドを去り、ヨーロッパを転々としながら生涯を送った 'Exile' であり、イタリア語やフランス語を使って生活を送らざるを得なかった。スティーブンの中に若き日のジョイスが、そしてブルームの中に成熟したジョイスの姿が反映しているのだとすれば、ジョイスが自分自身の境遇を「彷徨えるユダヤ人」の境遇に重ね合わせていたと言うことも出来るだろう。だがそれは必ずしも否定的な意味においてではない。

ジョイスは、ちょうど『若い芸術家の肖像』や『ユリシーズ』に描かれるスティーブンのように、カトリシズムや民族主義といったアイルランドの支配的なディスコースを桎梏と感じ、それ故、精神の自由を求めてアイルランドを去り、大陸で作家活動を続けた。『ユリシーズ』が1922年にパリで出版された後も、アイルランドでは『ユリシーズ』は長年にわたり禁書であった。もしジョイスがアイ

ルランドに止まっていたならば、『ユリシーズ』は決して日の目を見ることはなかったろう。またそれ以上に、“Exile”として大陸の様々な都市で生活をすることがなかったら、恐らく、『ユリシーズ』という多文化的で、多様な視点を含むポリフォニックなテクストが書かれることはなかっただろう。排他的で偏狭な国家主義・民族主義は、反ユダヤ主義をはじめ様々な他民族の抑圧や戦争を引き起こしてきた。そしてそれは英国の植民地支配による抑圧を受けてきたアイルランドにおいても反復されている。ジョイスはそのような民族主義に対して、単一の国籍・民族・文化に囚われぬ“Exile”の価値観を突きつける。そして“Exile”たるユダヤ人ブルームは、『ユリシーズ』の中でその役割を担っているのである。エドワード・サイードが『文化と帝国主義』の中で引用する中世の修道士フーゴーの言葉が思い出される。

> わたしは気がつくと、12世紀のザクセン出身の修道士サン＝ヴィクトルのフーゴーによる忘れがたく美しい一節に立ち返っている —
>
> それゆえ、修練をつんだ精神にとっては、眼に見えるはかない物事のなかに全てを最初に、少しずつ学ぶのは、大いなる美徳の源ともなるのだが、それは、そうすることで、そうしたはかない物事を置き去りにして進むこともできるからである。彼自身の故郷を愛おしむ者は、まだ未熟な初心者にすぎない。あらゆる土地が彼自身の生まれた地であると思える者は、すでに強靱である。けれども全世界を外国とみなすことができる者は完璧である。未熟な魂の持ち主は、彼自身の愛を世界のなかの特定のひとつの場所に固定してしまう。強靱なものは、彼の愛を、あらゆる場所に及ぼそうとする。完璧な人間は、彼自身の場所を抹消するのである。（エドワード・サイード、『文化と帝国主義』第２巻、みすず書房、Ｐ244）

おわりに

ジョイスは、『ユリシーズ』が設定されている1904年当時、ヨーロッパ、英国、そしてアイルランドで高まっていた反ユダヤ主義を背景に、主人公ブルームをユダヤ人に設定することを通して、英国による民族の抑圧と力による支配がアイルランドの民族主義にも反復している事実を暴露した。そして同時に、民族主義者が考えるように、アイルランドは単一の民族・文化から成り立っているのではないということを示し、当時支配的であったアイルランドの国家主義・民族主義を痛烈に批判する。この問題は『ユリシーズ』の主要なテーマの一つであり、『ユリシーズ』のポリフォニックなテクスト構造とも深く関わっている。しかし、ジョイスこのような批判は、現実の世界では無力であったように見える。『ユリシーズ』が出版された1922年、アイルランドは自治権を獲得しアイルランド自由国となっているが、内乱が勃発しアイルランド人同士が武力による戦いを繰り広げている。その後も、第二次世界大戦の勃発、ユダヤ人に対するホロコーストとジョイスが批判した状況は続き、現在でも異民族・異文化間の争いは絶えない。だが、ジョイスがここで示した考え方は、それらの問題を解決するヒントとして未だに有効性を持っているように思われる。

註

1）『ユリシーズ』からの引用は全て、James Joyce, *Ulysses*, A Critical Synoptic Edition.（New York and London: Garland Publishing, Inc., 1984）を用い、挿話番号と行数で示す。

2）統計の数字は、Dermot Keogh, *Jews in Twentieth-Century Ireland.*（Cork: Cork University

Press, 1998）から取った。

3）1882年５月15日にアレクサンドル３世によって時限立法として制定されたが、その後30年間効力を持った。人口１万人以下の村・町からのユダヤ人の追放、高等教育受けたり、専門職に就くことに対する制限などを含む、極めて反ユダヤ主義的な法律。

4）註２と同じく、*Jews in Twentieth-Century Ireland*を参考にした。

5）実際に「虐殺」が起きたわけではないが、リメリックでの迫害はユダヤ住民にって大きな恐怖をもたらし、そのころヨーロッパの様々な地域で起きていた「ポグロム」という言葉がすぐ思い浮かべられたため、このようないい方がされるようになったと推測できる。

6）1732年イタリアでSt Alphonsus Liguoriによって設立されたカトリックの教団。主に貧民の救済・伝道を目的としていた。

7）*Jews in Twentieth-Century Ireland*　p.28

8）Michael Davitt（1846-1906）、19世紀末に活躍したナショナリスト。1865年アイルランド革命同盟（the Irish Revolutionary Brotherhood）に加わり、1870には武器をアイルランドに密輸したかどで投獄される。1877年に仮釈放されると、２年後の1879年には、主に小作人の経済的な救済を目的とした「土地同盟」（Land League）を結成し、パーネルを代表に迎えて土地改革と自治権の獲得を目指して運動を展開した。彼は、パーネルのキャサリン・オシェイとの不倫問題が持ち上がったのを機にパーネルとは袂を分かつ。後に議員となるが、ボーア戦争に反対して辞職する。

9）*Jews in Twentieth-Century Ireland* p.22

10）Richard Ellmann, *James Joyce.*（London: Oxford University Press, 1977）p.384.

11）*Ulysses*［2:377］で、スティーブンは、“History is a nightmare from which I am trying to awake.”と述べているが、それはアイルランドの歴史のみならず、ユダヤ人が経験してきた迫害の歴史も指すと考えられる。

12）Seamus Deane（ed.）, *The Field Day Anthology of Irish Writing.*（Derry: Field Day Publications, 1992）, ‘Introduction’ xix

13）James Joyce, *A Portrait of the Artist as a Young Man.*（New York: The Viking Press, 1973）p.189 スティーブンはそこで、“The language in which we are speaking is his before it is mine. How different are the words home, Christ, ale, master, on his lips and on mine! I cannot speak or write these words without unrest of spirit. His language, so familiar and so foreign, will always be for me an acquired speech. I have not made or accepted its words.”と考えている。

ユダヤ人問題に関して参考にした主な文献

1）Dermot Keogh, *Jews in Twentieth-Century Ireland.*（Cork: Cork University Press, 1998）

2）Louis Hyman, *The Jews of Ireland from Earliest Times to the Year 1910.*（Shannon, Irish University Press, 1972）

3）Neil R. Davison, *James Joyce, Ulysses, and the Construction of Jewish Identity.*（Cambridge: Cambridge University Press, 1996）

4）Marilyn Reizbaum, *James Joyce's Judaic Other.*（Stanford: Stanford University Press, 1999）

県立広島大学人間文化学部紀要　2,　119-129（2007）

Synopsis

Ulysses and Anti-Semitism: Why Is Bloom a Jew?

Wataru TAKAHASHI

Bloom's father was a Jew. He left Hungary as "a wandering Jew", and arrived at Dublin in 1865. Next year, Bloom was born. His wife, Molly, was born in Gibraltar in 1870, and grew there until she moved to Dublin with her father when sixteen. His father, Brian Tweedy, was an Irish and her mother probably a Spanish Jew. Bloom and Molly got married in 1888.

Ulysses is an Irish novel and describes the people in Dublin. Then, why are these main characters Jewish? The purpose of this paper is to examine the meaning of Bloom, the protagonist of this novel, being a Jew.